Japanese Association for Religious Studies

公開シンポジウム

思想としての宗教

主旨

宗教はさまざまな現れ方をするが、思想もその一つである。思想ということを、考えることによって生み出されたもの一般という広い意味でとるならば、そこにはさまざまな位相とさまざまなレベルがある。歴史的諸宗教がそれぞれ承け伝えている聖典には、その宗教をその宗教たらしめる思想が内蔵されている。そして、その聖典をどのように解釈するかをめぐってさらに多くの思想が生み出されてきた。多くの思想が生み出され、積み重ねられてゆくことは、教えが人々に承け伝えられてゆく道程であり、そこに私たちは宗教的思惟の豊かな果実を見出すことができる。このような歴史的諸宗教の思想的展開は神学ないし教学という学問の形態を発展させてきたが、その一方で、思考そのものの普遍性に軸足を置く哲学という学問の形態とも結びついてきた。哲学と宗教の関係の様相は各伝統によって大きな違いがあるが、歴史を遡れば遡るほど、密接な関係があることはどの伝統でも言えることであろう。しかしまたその一方で、神学や哲学というような形態をとらない宗教的思惟の形態もある。それは学的な普遍性へと出て行かないだけに、個人的な宗教体験のなまの思想性とでもいうべきものをうかがわせて興味深い。

このテーマの基礎には、考えるということが宗教においてどういう位置を占め、どういう役割を果たすのか、という問題が潜んでいる。これまで一般に、思考（思惟、思索）は宗教の主要な特徴としては捉えられてこなかっ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

た。宗教を特徴づけるものとして主題化されたのは、信仰であったり、直観や感情や体験であったり、儀礼や祈りであったりするが、思考は知と結びついて、むしろそれらに対置されるものと見なされてきた。思考がもはや及ばないところ、人間の知性・理性が挫折するところこそ、宗教の領域だというわけである。しかしもしそうであるとしても、そこがもはや思考の及ばないところであると言えるのは、思考を尽くしてこそである。宗教という事象は、考えるということが実に多彩な営みであることを私たちに教えてくれる。特に考える営みの多彩さが平準化され、入信とは思考停止であると考える人々が多い現代の思想状況を鑑みると、宗教が思考に対してもたらしうる豊かな可能性に改めて目を向けるためにも、「思想としての宗教」というテーマを取り上げることは重要な意義があると考える。

（プログラム委員会）

講演　髙田　信良（龍谷大学教授）
　　杉村　靖彦（京都大学准教授）
　　西平　　直（京都大学教授）
コメンテータ　深澤　英隆（一橋大学教授）
司会　氣多　雅子（京都大学教授）

開催日　二〇〇九年九月一一日（金）
会場　京都大学　百周年時計台記念館　百周年記念ホール

NII-Electronic Library Service